隨感片々

矢谷清文

海底に溺れようとするものは其の水上に浮ぶ唯一條の藁ですら摑まうとする。それが僞らざる人間としての欲情だ。

◇

此處に一隻の航海する船が難破したと我々に想像せしめよ。其の中の或者は僅かばかりの自分の力と、習ひおぼへた技術とに依てあらん限りの人事を盡し、島、船、或は其他の自分を救助して呉れるところのものを指呼の間に置いて、而も其の儘死んでしまう、かと思ふとまた、何等の對抗力をも持たず、何等の爲すべき業をも知らないで、運を天に任せて浪の間に〳〵漂はされてゐるうち、不思議にも一つの島の岸邊に打上げられて萬死を免れるものがある。それが人生なんだ。

正直に、そして働いても〳〵彼は常に貧乏であり、虐げられてあり、輕蔑される。反對に邪惡で、

敖慢で、そして神を冒瀆するものが却て地位を得、財産を蓄へ、權力を把握してゐる。これが世の中なのだ。

◇

生きんがために彼等は生活し、生活するために彼等は勞働し、勞働しなければならないが故に彼等は生きなければならないのだ。

◇

太陽。――生活。――爭鬪。――血。血。血。眞赤く血の樣に燃え續ける太陽、それは永遠に我々の生活のシムボルだ。

◇

我々が直感から受ける其の次の思惟は多く周圍の環境に支配される。我々が田園に行んで、とある山陰から、或は廣々とした野原の向ふからユッタリと立上る煙を見ると、如何にも自分が平和の世界に在ることを思ひ、ムク〳〵とドス黑い色をして都會の工場の煙突から吐き出される煙は何となく生活――苦、諍鬪を連想せしめる。

◇

畢竟苦難と、滿さるゝところなき欲望と、不可解な疑問の限りない連鎖――だがお前はそれに對して感謝と喜悅とを持たなければならない。何故なれば、お前は生きてゐるから、生きてお前の體に赤い溫い血が流動してゐればこそ、苦難も感ずれば欲望や疑問も湧いてくるのだ。

◇

インスピレーションを待つ前に先づバースピレーションを求めよ。斯くしてカーネギーは財界の覇權を握り、ムッソリニは今や世界に君臨する英雄であり、ボンドフィールドはよく大英帝國の大臣とはなり得た。

◇

例へそれが小さな結果ではあらうとも、何事か成し得たと言ふその愉快さ。

◇

人生の眞の姿は寧ろ失意の時に見出だされる。懊惱を歡喜にかへ、涙の中に光明を認め得るものこそ幸にもまた偉大なるかな。

◇

最もよく『不幸』を知るものは、最も不幸な者であると同時に、また最も幸福なものもそれを知つ

てゐる。たとへば彼のソロモンとヨブの語らひを見よ、それは實際と空幻の異りがあるのみだ。

◇

我々は我々の過去に於て日蓮聖人のあることを誇りとする。だから自分は我々の歴史に一人のフォードと、一人のカーネギーとを持たないのを決して耻とはしない。然し希ふことなら今の思想界にガンヂーの熱と、今の教育界にペスタロッチの眞劍を持つものが一人欲しい。

◇

經濟學、社會學、自然科學、等々……そして宗教もついに宗教學とはなり終つた。宗教學は宗教ではない、其處には最早宗教としての生命は存在しない、我々が求めやうとするところのものは宗教であつて宗教學ではない。

――一九二九、九、一七稿――